The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	仏文学者としての原亨吉先生
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	Gallia. 2018, 57, p. 118-125
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69857
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

仏文学者としての原亨吉先生

柏木　隆雄

本日はパスカル研究会において、門外漢である私に大学での恩師である原先生についてお話しする機会を与えていただきまして、まことに光栄に存じます。

永瀬春男先生は私の一年後輩にあたりますが、原先生のパスカリアンとしてのお仕事を話されたので、私は学生時代にそのご講義を聞いたフランス文学研究者としての先生の一面を少しばかりお話ししたいと思います。私と先生との個人的なエピソードについては、すでにお手元の『ガリア』第52号に披露してございますので、改めて申しません。パスカルの数学論文についてのご業績を発表なさってからの先生は、ほとんど数学史家として活動されていて、フランス文学の方面では授業はともかく、論文などあまり発表なさらないでいらっしゃったことは、年譜に記されているご業績からもお分かりいただけますが、しかし、その本来はやはり文学者であったことは、先生が若き日に小島信夫や宇佐見英治、矢内原伊作氏などと「同時代」という同人誌に稿を寄せられていたことでも知られます。先生が一高の理乙で医者を目指しておられたことは皆さんもご承知の通りですが、蛙の解剖が嫌で、それを止められた、と冗談のようにおっしゃっておられました。

先生が京都大学に進まれたのは、哲学、とりわけ田辺元の哲学に憧れというか、闘志と言おうか、それに挑戦しようとされたのは、そこでは難解な田辺哲学が講じられていたから、ということです。しかしその哲学の解読がやっぱり難しいままに東京大学の仏文に入りなおした、とおっしゃっておられました。そのお言葉には、いささか原先生一流のミスティフィカシオンが入っているように思われます。

田辺元の存在のほかに、当時京大哲学には、華々しい名声を得ていた九鬼周造がおり、ちょうど原先生が入学された翌年に『偶然性の問題』やパリ留学中の折々を歌った詩歌集が出ていることも注意を引きます。いずれにしても先生の哲学的興味、あるいは知的挑戦は必ずしも満足させられなかった。そこでやはり文学に戻ろう、ということになったのでしょうか。ところが卒業後ほとんど間をおかずに軍隊に入られますから（軍隊では、馬の世話や馬具や秣の中で寝起きした経験もされたようです。先生はいわゆるポツダム中尉だ、と自嘲的に話されたことがありました。先生のご気質からすると、きっと生真面目な将校として表向きは過ごされたと思います。）、原先生におけるフランス文学が実際のものとなるのは、復員されて同志社大学の講師となられてからのことかと思います。先ほど申した「同時代」への寄稿もこの頃からになります。

さて原先生が同志社から関東学院大学に行かれて6年目に、助教授として大阪

大学に赴任されるのですが、その間のフランス文学者としてのお仕事はマラルメ研究で、それはご業績のリストから覗えるとおりです。

先生が人文書院の『パスカル全集』の数学論文集の翻訳を担当されたのは、おそらく和田誠三郎先生の委嘱によるものだろうと思います。和田先生も編集委員の一人として名前があげられているからです。おそらく原先生はこれも教授からの命令で仕方ない、と思われたのでしょう。それがのちの原先生の将来を大きく変えるとは、先生ご自身予想もしておられなかったではないでしょうか。

関東学院大学でのマラルメ研究の成果は、先生が阪大にいらしてすぐ開花したわけではありません。先生が『ガリア』第30号記念号に思い出を書いておられるとおり、和田先生から『ガリア』への長い論文を慫慂されて、当時九鬼周造の旧蔵書が、九鬼の親友であった天野貞佑が校長を務めていた関係で、旧制の甲南高校に収められていたのを知り、（このあたりも原先生の九鬼への思い入れがあるように思われますが）甲南大学となったその倉庫に荷造りされたままにしまわれていた梱包を開いて、当時稀覯であった *Revue de métaphysique et de morale* を見出し、そこに掲載されているアランの初期哲学論文を、当時ゼロックスもなかった時代に、そのほとんどを筆写して読破、いわゆる和田先生からしきりに求められた「長い論文」を書き上げて、『ガリア』第3号に掲載されることになります。それが「アラン研究（Ⅰ）」というものです。

アランは関東学院大学時代に『海辺の対話』や『思想と年齢』といった翻訳でかかわっておられました。それはおそらくマラルメ研究の行くところ、ヴァレリーに進み、そしてその関係からアランへと向かった、ということもあろうけれど、太宰治さえ、ヴァレリー、ヴァレリーと小説に書くほどに、戦後日本に喧伝された詩人、思想家でありましたし、それにつられてアランもまた日本人の耳目を引いた哲学者でした。原先生が訳筆を染められたのも、そうしたヴァレリーブームの余波、ではなかったかと推察されますが、それをご本人に確かめたわけではありません。

そしておそらく和田教授から長いものを、と言われた先生は、転任まもない頃とて、当時一番関心の深かったマラルメについて考えを進める時間がなくて（先生は極めて慎重で完璧なものを求める方でしたから）、翻訳で苦労して調べ上げたアランの著作の背景となる思想の源泉に当たろうとして、折しも九鬼周造文庫に眠る哲学雑誌のあることを、和田先生の親友で、当時の阪大哲学の主任教授、しかも九鬼の一番弟子と自負する沢瀉久敬先生に教えられて、甲南大学に向かわれたのだと思います。

この論文は確かに長い。創刊当時の『ガリア』の組み方で35頁もありますから、ほぼ原稿用紙100枚は書かれたのではないでしょうか。この綿密な論文はいかにも原先生らしい書きぶりで、あるいは自分が一旦引き返した哲学への遺憾の思いをぶつけるかのような調子さえあります。「私」という主語がかなり頻繁に現れて、私たちが日頃知っている謙遜の態度を崩さない、いつもの原先生と異なる感じが見えるのも、そうした気の張りが、思わずも発現していると考えていいでしょう

か。

綿密な論と言いましたが、アランの思想の拠りどころとしての彼のリセ・ミシュレ校での師であるルイ・ラニョーの哲学を紹介する手順はいかにも原先生らしい。まずラニョーの伝記を細かに追い、それから彼の主著を概観し、アランがそれらをどのように評価し、注釈をつけているかを丹念に辿るのがこの論文の骨子ですが、悪い癖の出始め、といいますか、先生はこのアラン研究Ⅰをラニョーの哲学の紹介に終わって、ではアランの哲学はどのように開花するのか、という肝心の論の手前で時間切れか、量の問題かで次回を期しておられるのですが、このⅡはついに書き継がれることはありませんでした。

1956年に出た人文書院の『ランボー全集』全3巻は大変美しい本で、私はじつはこの本について特別な思いがあります。私は工業高校を出て住金の中央研究所に入ったのですが、その時東大工学部の大学院の冶金を出た人が文学好きで、私が同じような趣味の持ち主と知ると大学への進学を勧めて、いろいろ激励してくれました。そしてもし大学の文学部に合格したら、秘蔵の『ランボー全集』をやろうと約束してくれまして、私が合格発表の日、会社を抜けて発表を見に行ったら、おそらくビリかその周辺あたりでしょうが、ともかく合格していまして、すぐさま近くの公衆電話で研究所にいるその人に電話すると「ランボー全集せしめたなぁ！」と一言。それが合格へのお祝いの言葉でした。その時は全く知らなかったのですが、阪大に入ってから読んだその全集の「放浪書簡」の一部を翻訳しておられたのが、原先生でした。おそらくマラルメを勉強していた、ということで全集の編者の一人であった恩師の鈴木信太郎先生のご推挽ではなかったかと思います。

その意味でその3年後、1959年同じ人文書院から出る『パスカル全集』はこれも編者の一人であった和田誠三郎教授の依頼もあり、本屋も知っている、ということで、それなりに力を尽くされたものと思いますし、先ほども申しましたように、それが思いもかけず先生の学問の方向を曲げる結果になったわけです。

実はその『パスカル全集』と同じ年に、平凡社から『世界名詩集』という特異な文学全集がでて、その「フランス編Ⅱ」に原先生はマラルメの後期ソネの訳を出しておられます。この詩集の編者には福永武彦も入っていて、福永は原先生の先輩ですから、おそらく原先生の関東学院時代のマラルメ論考を知っていて、ことに難解な後期ソネを原先生に充てたのではないでしょうか。パスカルの数学論文の翻訳とマラルメの訳がほぼ同時期に発刊されているのは、あくまで偶然で、準備の方から言えば、パスカルの方が大変だったろうと思います。昔と違って、赤木昭三先生が今度の『ガリア』52号に書いておられるように、赤木先生や坂本賢三氏など当時の院生に下訳をさせての仕事と言え、凝り性の原先生は、それこそ綿密な調査を施したうえで翻訳にあたられたと思います。もっとも赤木先生も人も知る徹底した実証主義の緻密な研究者ですから、おそらくその下訳も頼もしいものだったに違いありません。

そう考えるとマラルメの翻訳は、そうした苦渋が感じられない、きわめて華麗

な翻訳ぶりです。おそらく関東学院の論文を何篇か書かれるときに、こうした翻訳の下地となるものは、すでにできあがっていたのではないでしょうか。そこにプリントしてお目にかけました。量が多くなるので、他の訳者、たとえば鈴木信太郎の訳は載せませんでしたが、鈴木訳がやや説明的、解釈的であるのに対して、原訳は如何に詩として独立して美しさを出すか、一読して意味が分かるようにするか、に努力が払われているように思います。詩の翻訳で注意すべきとされるコントルサンスの訳語はあまりないように思われます。いずれの詩にしましても、一読してすらすら理解が進む、といったものではありませんが、原先生一流の美学は貫いておられるように思います。

少しその例を示してみることにしましょう。

Au seul souci de voyager	華麗にけむる印度をこえて
Outre une Inde splendide et trouble	一途に渡る旅のこころに
— Ce salut soit le messager	—使者と発て　この会釈、船尾が
Du temps, cap que ta poupe double	はや周りゆく時間の岬の
Comme sur quelque vergue bas	カラベラと競って　低く
Plongeante avec la caravelle	ひたかける帆架の上か
Écumait toujours en ébats	新しい告知の鳥が
Un oiseau d'annonce nouvelle	いつも嬉々と泡立っていた
Qui criait monotonement	舵は一路変わりなく
Sans que la barre ne varie	鳥はひねもす同じ調子に
Un inutile gisement	徒らな地貌を叫べば
Nuit, désespoir et pierrerie	夜か　絶望か　宝石か
Par son chant reflété jusqu'au	その歌は谺して　蒼ざめた
Sourire du pâle Vasco	ヴァスコ・ダ・ガマの微笑を染める。

こうして写していると、原先生の独特の抑揚を持った声調が、耳に響いてくるような気がします。マラルメのこのソネは、日本の詩語に移すのは相当の苦労が必要で、先生も訳の正確と詩的美の階調に苦労しておられることは、今一つの例においても明らかです。

Tout Orgueil fume-t-il du soir,	夕されば　すべての誇りは　ひとふりに
Torche dans un bra²nle étouffée	消し絶やされた松明の　煙と失せる？
Sans que l'immortelle bouffée	朽ちない息吹き　ふき通わせて
Ne puisse à l'abandon surseoir ?	廃棄をとどめるよすがなく！

La chambre ancienne de l'hoir	いくた豊かな戦利の品は　はや墜ちて
De maint riche mais chu trophée	襲け継ぐ人の古来の部屋に
Ne serait pas même chauffée	寒さを凌ぐ辺もないか
S'il survenait par le couloir.	ふとその人が　廊下を踏んで 訪い来ても
Affres du passé nécessaires	さながらに猛禽の爪をふるって
Agrippant comme avec des serres	否認の墓をひたと捉える
Le sépulcre de désaveu,	来し方の必至の苦悶よ、
Sous un marbre lourd qu'elle isole	大理石重たく際立つ下に
Ne s'allume pas d'autre feu	ただ　折からの火をとぼす
Que la fulgurante console.	閃々たるコンソール。

以上２つの例を示したに過ぎませんが、詩に長じない素人の僭越を敢えて冒せば、概ね七, 五、あるいは五, 七の階調をそなえ、詩的体裁を整えながら、なおマラルメ的な語彙、「廃棄」、あるいは「否認」といった言葉を、他の語に置き換えることの不能を知りつつ、使用するところに、先生の苦辛と限界の了承があると評することができるでしょうか。文語的要素に多くを拠りながら、つい口語的表現を交えてしまう、あるいは交えなければならぬ現代の訳詩の通弊に、先生も陥っているのは、マラルメという厄介な詩人と取り組めば、如何ともしがたいことだったと思われます。他の訳詩も合わせて８編、是非一読をお勧めしたいと思います。先生の仏文学者としての良心と詩魂を、しみじみと感じることができるはずです。

私が学部３年生の終わりの卒業生を送る懇親会の席で、たまたま横にいらした原先生に平凡社の『世界名詩詩集』の訳詩を話題にして「アルカイックな翻訳詩ですね」と言ったら、苦笑いされて「クラシックな、と言ってくださいよ」とおっしゃって、「アルカイック」という語を、美的に優れているものの称の一つと心得ていた私の迂闊を窘めて下さった思い出とともに、マラルメのソネット訳は、私にとって謂わば永遠の訳詩の一つと言って良いと思います。

その私が阪大に入学したのは 1965 年、先生がフランスでドクトラを取られて帰られたのが同じ年の５月。２年後仏文に進学して、初めて原先生の特殊講義と演習を受けることになりますが、先生はおそらく渡仏以来、ほとんどパスカルおよびロベルヴァルの研究にいそしんで、本来の関心事、あるいは研究の対象であったマラルメを顧みられる余裕はなかったように思われます。したがって仏文科の講義は先生にとって、文字通り苦虫をかみつぶしたような講義姿勢にならざるをえなかった、と私は今にして考えるのです。

思いもかけなかったパスカル翻訳を通じて、もともとの理系思考であった原先生に数学史的興味が湧いたこと、そしてこの仕事は自分を措いて他のフランス文学・フランス語学者にはできないことの自覚、しかしマラルメ詩学への抜きがたい興味と嗜好、それを教場で論じるには、時間が余りに足りない！しかも仏文科

の講義は自分が今現在において携わり、義務感も伴いながらも勤しむことになったパスカルの数学理論を考究したものを講壇に乗せることもできない。おそらく私が最初に受けて感銘を受けた（一年後輩の永瀬君はこの講義を胸躍らせて聞き、もう一年先に講義を聞いていた私をうらやましく思ったと告白しておりますが）原先生のマラルメの講義は、関東学院大学時代の研究の余滴であったような気がします。

もちろんそれは、原先生のお人柄からしても、なおざりのものではありませんでした。初期の詩編に現れる特徴的なテーマ、北斗七星、難破、白色、といったものに焦点をあて、それらが現れる詩編を一つ一つ分析していく、というのは初心の者にもわかりやすく、学部生の講義にはまことに適当であったし、講義の印象は今も鮮明に残るほどで、名講義と言っていいかと思います。私のバルザック研究の講義も、頭に原先生のマラルメの連年の講義を模したところもありました。

このマラルメ講義は、最後の「賽の一擲」をもって終わることになり、難破船の船長が沈みゆく船の中、水に埋没しつつ、手の中にある骰子を振って自分の運命を図るところの詳しい分析で終わりました。あたかも原先生の最終講義（この時私はパリにいて出席することができませんでしたが）で、パスカルの賭けの比喩を持ち出されたのは、これも偶然ながら、先生の思考、趣味、あるいは先生の中にある問題意識の原型を示すものかもしれません。

先生は阪大仏文を退職されてから、ひたすら数学史の研究と著述に時間を過ごされます。天理大学での初級フランス語の担当、アリアンス・フランセーズの理事長として、もめる教員や受講生の取りまとめに苦労なさったことを、パスカル数学論文翻訳の遅延に絡めて、もしああいう世俗的なことに時間を取られなかったら、と悔しがる先生方も多くいらっしゃいますが、原先生は義務的なことがらに対しても、案外それらを楽しんでおられた風もあるのではないかと俗物の私は考えたりしています。

それはともかくその理事長の職も終えられて、ご自分の研究にいそしんでおられたその晩年、ガリア創刊 30 年を祝う会を阪大の待兼山で開いた帰り道、俗称阪大坂の暗い道を原先生と連れ立って二人で降りているとき、「私は梶井基次郎は素晴らしい日本文を書く作家と思う。以前からあの文章をフランス語に訳したいと思っている」とおっしゃられ、私はぜひそれはおやりください、と申したのですが、さてそんな訳をだれが引き受けてくれますかね？とおっしゃるので、『ガリア』があるじゃありませんか。『ガリア』にぜひ先生の仏訳を載せましょうよ、と申しました。それが阪大仏文創立 50 周年号に掲載された梶井基次郎の短編 2 編の翻訳です。すでに「檸檬」は仏訳があるということでこの 2 作になったのですが、しかし先生の処女論文と言える『梶井基次郎の文学』（「同時代」1948）は、梶井の文学の本質を先生独特の見識で断じていて、翻訳された 2 編は先生の最も厳しい目にも傑作と映ったもので、もし翻訳に解説を先生が付されたとしたら、じつに興味深い、意義深い論になっただろうと惜しまれます。その翻訳の一部をお目にかけましょう。フランス人のチェックが入っているにしても、日本文の味わいを

損なわないように細心に訳されたことが良くわかるものです。
まず『櫻の樹の下には』の冒頭部分。

Au-dessous des cerisiers, sont ensevelis des cadavres!

C'est chose croyable. Car il est incroyable, n'est-ce-pas, que ces arbres puissent s'épanouir avec tant de splendeur. Incapable de croire à cette beauté-là, j'étais inquiet depuis deux ou trois jours. Mais maintenant, j'en arrive enfin à comprendre. Au-dessous des cerisiers, sont ensevelis des cadavres. Oui, c'est chose bien croyable.

櫻の樹の下には屍體が埋まつてゐる！
これは信じていいことなんだよ。何故つて、櫻の花があんなにも見事咲くなんて信じられないことぢやないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だつた。しかしいま、やつとわかるときが来た。櫻の樹の下には屍體が埋まつてゐる。これは信じていいことだ。

そして『Kの昇天』も冒頭部分のみ掲げることにします。

Votre lettere me donne à penser que vous vous tourmentez sur la noyade de M.K. en vous posant différentes questions. La mort était-elle accidentelle ou bien volontaire? Et dans le second cas, quel en était le motif ? N'était-ce pas par suite d'une maladie incurable ? C'est pourquoi, je présume, vous m'avez écrit, à moi que vous ne connaissez point, mais qui avais rencontré par chance ce Monsieur K.

お手紙によりますと、あなたはK君の溺死に就て、それが過失だつたんだらうか、自殺だつたらうか、自殺ならば、それが何に原因してゐるのだらう、或は不治の病をはかなんで死んだのではなからうかと様ざまに思ひ悩んでゐられるやうであります。そして僅か一と月程の間に、あの療養地のN海岸で偶然にも、K君と相識つたといふやうな、一面識もない私にお手紙を下さるやうになつたのだと思ひます。

以下それぞれの翻訳の続きは、『ガリア』第40号で味読して頂くことにしますが、いずれも梶井の淡々として、しかもどこか骨のある強靱な文体が、実に巧みにこのフランス語訳文に取り込まれていることは、僅かの引用によってもご理解頂けると思います。

ところで、この翻訳について面白いことがありました。ある晩原先生から私の家に電話があり、『Kの昇天』にある、「イカルスが幾人も来てはおっこちる・・・」というラフォルグの詩句のフランス語原文を教えてほしい、ということでした。そしてその翻訳者は梶井自身か、それとも誰かのものを使っているか、教えてほしいということでした。（フランス語に訳する際に確認が必要だったのでしょう。）

私は安請け合いして、手近にあったラフォルグ全集をひっくり返し、それと思しき箇所を（といってもイカルスが出てくる詩を拾えばいいだけですが）取り出してコピーし、ファックスで「梶井の引用は原文と大分違う訳です。梶井自身がおそらくは友人の三好達治から聞いたのではないでしょうか？」と注記してお届けしたのですが、原先生のご自宅の電話番号を押して、ファックスの紙がスーッと巻かれていく瞬間に、はっと思い出したのです。これは上田敏の『牧羊神』にあった詩句だ！と。

さっそく敏の訳を見てみると、どんぴしゃり。筑摩書房の『梶井基次郎全集』の注は、単に固有名詞だけを注して、その翻訳が誰であるか、といったことには何も触れていないのに、正直驚きました。ここにはじつは極めて興味深いことがらがあることに気がつきます。すなわち梶井がこの上田敏の訳詩を引いた時には、自ら注の必要のないほどに敏の訳詩が人口に膾炙していたこと、読者もすぐ訳詩のことが思い浮かべられたこと、そして現代は相当の知識のある人にとっても、敏の訳詩が記憶から遠くなっていることです。

この梶井の短編２作の翻訳は、原先生の詩魂が、晩年になってもまったく衰えていなかったこと、フランス語に対する関心と自負、そして自らの仏学者としての使命感が衰えていなかったことを示すものにほかなりません。これは生涯の最後の最後までライプニッツやケプラーに取り組んで、それも彼らの著作のラテン語原文に直接当たらずにはすまない実証主義、真理への畏敬といったものの、原先生における深さをしみじみと実感させるものです。

このことを申して私の拙い話を終えたいと思います。最後に少し時間を借りまして、原先生が阪大仏文創立50周年を記念するガリアの研究会でご自身の思い出を語られる映像を映して終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

（大手前大学客員教授）